

# 光秀の娘・ガラシャの一生

あつい信仰心と夫・忠興との愛憎劇

2021年2月22日@小倉城天守閣 福岡大学人文学部 山田 貴司

〔主要な参考文献〕

- ヨハネス・ラウレス「細川家のキリシタン」（『キリシタン研究』4 輯、1957年）
- 水野勝之・福田正秀『加藤清正「妻子」の研究』（ブイツーソリューション、2007年）
- 安廷苑『細川ガラシャ キリシタン史料から見た生涯』（中公新書、2014年）
- 熊本県立美術館編『細川ガラシャ』展図録（細川ガラシャ展実行委員会、2018年）
- 井上章一・呉座勇一・フレデリック・クレインズ・郭南燕『明智光秀と細川ガラシャ』（筑摩書房、2019年）
- 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』（中央公論社、1977～1980年）
- 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（同朋社出版、1987～1998年）

1

## はじめに

○いま、私たちがもっているガラシャに対するイメージ

- ・細川忠興が溺愛し、豊臣秀吉も興味を持っていたという**美貌の女性**。  
（ドラマや映画では、旬の女優が演じてきた。**でも、本当に美人?**）
- ・**熱心なキリシタン**となり、個性豊かに激動期を駆け抜けた当時の女性の代表格。
- ・「謀反人の娘」とみなされ、関ヶ原合戦の直前には、**家のため、夫のために命を投げ出した悲劇のヒロイン**。

→ ただ、こういうイメージは、どれほど実像に近いのか!?

○この講演の目的

- ・**最新の研究成果を踏まえ、実像を改めて検討**（とくに忠興との関係）。
- ・そして、ガラシャがこの**小倉の地に与えた影響**もみていく!
- ・実像の解明を通じて、ガラシャ研究が持っている**意義・意味**あいを確認。

2

## ☆この講演で使用する史料について

### 1) 日本で記されたガラシャ関係の史料

- ・歴史学の研究にあたっては、**史料の性格をよく理解**し、使用していく必要。
- 研究対象と**同時代に記された手紙や日記が、信頼性の高い史料**とみなされる。
- ・ただし、ガラシャについては、同時代の日本の史料は断片的。
- 自身がしたための消息17通、親戚であった吉田家の日記・記録類、親交のあった公家や寺社関係者の日記、そして最期の場面に触れた諸将の手紙など。
- ⇒そのために、**江戸時代に細川家で編纂された「家譜」（家の歴史書）も活用せざるをえない状況**。
- ☆したがって、『綿考輯録』といった「家譜」類が**典拠となっている部分は「検討の余地があるかもしれない」と、注意されたし!**

3

### 2) 豊かな人物像を伝えるイエズス会関係史料〔安2014〕

- ・16世紀後半から17世紀前半にかけて来日した**イエズス会宣教師は、キリスト教の布教状況を伝えるために書簡や報告書「日本年報」をヨーロッパに送付**。
- ガラシャが入信した1587年以降、その動静を豊かに伝える重要な史料群に。
- ※ヨーロッパからきた**外国人の記録、ほんとうに信用できるの!?**
- ・イエズス会の宣教師は、ヨーロッパの大学で学んだエリート集団。語学も堪能。
- ・報告書にみえる諸情報は、**宣教師たちが為政者や信者と交流する中で得たもの**。
- ・ガラシャは、宣教師と一度しか会ったことがないが・・・。
- しかし、ガラシャ自身が宣教師に手紙を送ったり、侍女が教会を訪れたりしており、**教会関係者は彼女周辺の事情をかなり把握していたとみてよい**。
- ⇒文面に誇張があったり、反キリスト教的な人物に対する辛辣な論評はあるにせよ、**内容的には信頼の置ける史料群**。

4

## 1 若き日のガラシャ

### 1) 出生の時期と場所

- 永禄6年(1563)に明智光秀と妻木熙子の娘として誕生。
- 生誕地は越前とされる。候補はふたつ。
  - 福井県福井市東大味
  - 福井県坂井市丸岡町の称念寺門前
 →ただ、光秀の細川家「中間」説や、室町幕府の幕臣説を踏まえると、ほんとうに越前生まれ? 京都も候補地か?
- 名前は玉/珠/玉子/珠子。



東大味の明智神社に設けられた石碑

5

### 2) 細川忠興との婚姻

- 『綿考輯録』によると、室町幕府の幕臣から織田家中に転じ、活躍していた明智光秀と細川藤孝に対し、織田信長は両家の婚姻を提案。
- 忠興は信長のお気に入りの小姓。ガラシャはトップクラスの家臣の娘。
- 評判となったであろうゴールデンカップル!
- 家譜類によると、興入れは天正6年(1578)8月。ともに16歳。
- 新婚生活の舞台は山城西岡の青龍寺城。前年に「新造之御殿」ができていた(『綿』巻3)。
- 新領地を得た天正8年後半以降は、丹後へ転居。



青龍寺城跡に設置された忠興・ガラシャ夫妻の像

6

### 3) 忠興との間に生まれた子どもたち

- ガラシャと忠興には**3男2女が誕生**。生年月日と生誕地を整理すると…。
  - 長男/忠隆 天正8年(1580)4月27日 生誕地/青龍寺城
  - 長女/長 天正10年(これまでは同7年とされてきた) 生誕地/丹後
  - 次男/興秋 天正11年(同12年説もあり) 生誕地/丹後? 大坂?
  - 三男/忠利 天正14年10月11日 生誕地/丹後
  - 次女/多羅 天正16年 生誕地/大坂? 京都?
- 本講演の新しい話…**長の生誕年**。家譜類にも記載がなかったために、婚姻の年代等から天正7年とされてきた。(↓日向しほ・木下博之両氏の教示)
  - 九大図書館所蔵の細川系図『系図寛文マテ』に**天正10年生まれと明記**。
  - 吉田家の祈禱記録『諸社祠官伝授案并祓表書』(天理図書館所蔵)にみえる天正10年正月の「**長岡与一郎女房衆**」の出産祈禱は、長の出産にかかわるもの。
  - ☆忠興がガラシャの出産を心配していた様子、当時の夫婦関係が少し明らかに!

7

### 4) 宗教への関心

- 宗教への関心は家庭環境から!? **親戚には宗教関係者がずらり!**
- 参禅の師は、**義父藤孝の甥・英甫永雄**(後に建仁寺住持)。
- 〔史料〕「忠興公譜」(『宇土家譜』の内 熊本県立美術館所蔵)
- [加羅奢様、始ハ建仁寺之祐長老に三十四五則参学被成候しか、忠興公大徳寺の参学よりハ心安ものなるへしと被仰候、](#)
- 藤孝の従兄弟は、吉田神社の神主にして公家でもあった吉田兼見。
  - 藤孝のみならず、明智光秀とも懇意。長の出産時には吉田神社で安産祈願。
  - 藤孝の弟には、後に大徳寺住持となった玉甫紹踪も。
  - じつは、**仏教や神道に親しみ**を持ちつつ、若いころを過ごしていた!

8

## 2 運命を変えた本能寺の変

### 1) 本能寺の変と細川家

- ・天正10年(1582)6月2日、明智光秀が京都の本能寺で織田信長を襲撃。
- 信長を討った光秀、安土城を押さえる一方、朝廷や諸国の大名に連携を打診。
- ⇒ところが、**細川父子はこれに与せず!**信長に哀悼の意を表し、**丹後を動かず。**
- ・光秀が周囲との連携にもたつく間に、羽柴秀吉が中国地方から畿内へ急進。
- 同年6月13日、山崎の戦いで明智勢を撃破、光秀を滅ぼす。
- ・この間に**藤孝・忠興父子は、秀吉に接近。丹後にあった明智領を接收。**
- ・同年9月、細川家打倒の動きをみせた丹後守護家の一色氏を討伐し、**丹後平定。**
- ☆本能寺の変後、またたくまに**秀吉に従う丹後の豊臣大名としての立場を確立。**

9

## 2 運命を変えた本能寺の変

### 2) 本能寺の変とガラシャ

- ・本能寺の変により、**ガラシャの立場は「出世頭の娘」から「謀反人の娘」へ。**
- ・**忠興はガラシャを離縁し、丹後の味土野に送ったとされている。**この時、20歳。
- ※明智の血縁者は、光秀に与する疑惑を招く存在。Ex, 殺害された津田信澄の例。
- 一次史料に彼女の処遇を記したものはないが、**なんらかの措置があったとみてよい。**
- ではなぜ、彼女は味土野に離縁された? 殺害されなかった? 追いつけなかった?
- [以下、山田の考え。以前と少し変わっているところもあります…]
- ☆光秀の娘を妻として近くに置いておくと、当然問題が発生。ゆえに処分を実施。
- ☆ただ、**殺害してしまうと、明智勢が優勢になった時に問題。**ゆえに離縁。
- ☆離縁したといっても、付き返すと、**万一の時に人質にならない。**ゆえに幽閉。
- ☆幽閉といっても、**自領に残しては反明智勢の不審を招く。**ゆえに味土野。
- ※当時味土野が誰の所領であったかは不明だが、山中の境界エリアなのは間違いない。
- ⇒**味方の不審を避けつつ、明智優勢に備え、復縁の可能性も残した絶妙な判断!**

10

## 2 運命を変えた本能寺の変

### 2) 本能寺の変とガラシャ

- ・なお、ガラシャが送られた先は**丹波の三戸野(水戸野)だった、とする説も存在。**
- ・17世紀末に成立した『明智軍記』や18世紀後半に成立した『綿考輯録』など。
- ・昨年発表された森島康雄「細川ガラシャの味土野幽閉説を疑う」(『丹後郷土資料館調査だより』9号、2020年)では、「**丹波三戸野と考えるのが自然**」との結論。
- 丹波と丹後、どっちがより適切な学説なのか!? 山田は丹後でいいと考えるが…。
- ・森島は、丹後味土野説を「(延宝7年、1679成立の)「本朝武林伝」の「伝」に記された「丹後国上戸」を端緒として生み出されてきた伝説」とする。
- しかし、**丹後説は寛永14年(1637)以前刊行の軍記物『太閤記』(小瀬甫庵作)に明記。**天和3年(1681)以前に編纂された宇土細川家の家譜も丹後説を記す。
- ⇒一次史料がないために決着は付かないが、『本朝武林伝』以外にも丹後説の記述はみられる。しかも、『明智軍記』や『綿考輯録』よりも成立時期ははやい。

11

## 3 キリスト教への改宗

### 1) 忠興との復縁

- ・天正11年(1583)後半から翌年初頭にかけて、**ガラシャは忠興と復縁。**
- ・同13年5月頃は丹後におり、同年10月までに新造された大坂玉造の屋敷へ。
- ・なお、**ガラシャを離縁している間に、忠興は側室を持ち、子どもも生ませている。**
- 『綿』巻九によると、側室となったのは荒木村重の家臣郡宗保の娘の藤。
- 村重の没落後も生き残り、ガラシャのもとへ(荒木村安の妻はガラシャの姉)。
- ⇒天正13年に娘を出産。**ガラシャ不在の間か、興秋出産の間か、みそめたか!?**
- ・**ガラシャは藤の存在をよく思わず。**侍女に伝えた遺言には、「**謂わざる事ながら、藤をお上へ御直し成されぬやうに**」とあり(『綿』巻13)。
- ☆復縁し、正室に復帰したとはいえ、「謀反人の娘」とみなされ、忠興に側室もできた結果、彼女は「**憂愁に閉ざされ**」たままの状態に…。

12

## 2) キリスト教との出会い

- ・ガラシャを心配していた忠興、高山右近から聞いたキリスト教のことを語る。

〔史料〕天正15年10月平戸発ブレネステイーノ書簡〔安2014〕

彼女は、靈魂の不滅を否定する日本の宗派に属していた。それゆえ、この夫人は深く憂愁に閉ざされ、ほとんど現世を顧みようとしなかった。夫人の態度は、夫を心配させることが少なくなかったため、二人はしばしば言い争っていた。越中殿は、(高山)右近殿と親密な間柄であった。越中殿は、右近殿から神とキリスト教に関する様々な話を聞き、この問題について夫人に語った。それはまったく初めて聞く話であった。しかし、夫人は大変な理解力と聡明さを備えた人だったので、聞いたことを時折熟考し、問題をより根本的に知ることを切望するようになった。

- ・キリスト教の話聞いたガラシャ、さらに教えを知りたいと望むように。
- しかし、彼女は「謀反人の娘」。しかも、忠興は嫉妬深い男。教会を訪ねるところか、外出することにも大きな制約があった模様。

13

## 3) キリスト教への改宗

- ・教会訪問の思わぬチャンス！豊臣秀吉の九州征伐に忠興も従軍することに。
- ・忠興は天正15年(1587)2月5日に出陣予定。ガラシャはこのタイミングを逃さず、その2週間後に教会訪問を実現。夫のいない間に、夫に黙って…。

→ 教会には宣教師セスペデスがいたが、説教は修道士コスメが担当。改宗を決意。

〔史料〕1588年2月20日付ルイス・フロイス書簡『十六・七世紀イエズス会日本報告集』

(司祭たちは)すぐコスメ修道士をして説教させ、彼女たちが質問したこと、および教理に属することを説明させた。この説明を(ガラシャは)非常に注意深く長い時間聴いた。この夫人は、彼(コスメ)に対して激しく論争をしかけ、日本の宗派の説く道理で彼に答え、彼に様々な質問をし、我らの教えについて議論したので、修道士は大いに驚き、日本でこれほどの理解力を持ち、また日本の宗派について良く知っている夫人を見たことがない、といった。(中略)彼女は我らの教えに極めて満足したので、好奇心は賛嘆と信心に代わり(中略)キリシタンになりたいと思い始めた。

- ・ただ、軟禁状態で教会を再訪できず。そのため、侍女の清原マリアが「代洗」。
- 「ガラシャ」誕生！秀吉が博多で伴天連追放令を出した直後の受洗。25歳の時。

14

## 4 キリシタンとなったガラシャ、忠興との関係は？

### 1) イエズス会関係史料に記された、改宗後のガラシャの様子

- ・キリスト教を学ぶ中、性格に変化。「忍耐強く、かつ人格者となり、気位が高かったのが謙虚で温順」になったという。
- ・『コンテムツス・ムンジ』というキリスト教の書物を侍女とともに講読。
- ・ローマ字もマスターしたらしく、多くの和訳ローマ字の「靈的な書物」を達筆で「日本語に翻訳」と伝えられる。
- ローマ字で書かれた文を、ひらがなと漢字交じりのものに変換する作業に従事？
- ・侍女のみならず、病氣となった次男興秋を受洗させ、ふたりの娘もやがて受洗させることに。

15

### 2) 帰還した忠興との関係

- ・九州征伐から帰った忠興は、伴天連追放令発布の影響もあり、キリスト教を敵視。
- ※伴天連追放令は、キリスト教を「邪法」とし、宣教師の国外退去を指示するもの。
- 家中のキリシタンを注視。ガラシャの侍女や乳母をキリシタンとして追放。
- ガラシャの改宗も気づいた？「少なからず変化がある」とみてはいたようだが…。
- この時点で「キリシタンであることは、まだ発覚」せず(『日本史』2部110章)。
- 「1596年度日本年報」にも「彼女は、自分の改宗のことを少しも(忠興に)打ち明けていなかった」と明記(『イ会日本報告集』)。
- ※〔ラウレス1957〕によれば、ガラシャの信仰告白は文禄4年(1595)とされる。
- ☆ガラシャは夫に黙って改宗したうえ、そのことを8年間隠し続けていた！？

16

### 3) ガラシャの離婚願望

- ・改宗した直後、天正15年(1587)後半から翌年にかけて、**ガラシャは離婚を希望。**

〔史料〕フロイス『日本史』2部111章掲載のオルガンティーノ書簡

過日私(オルガンティーノ)は、ガラシャがその夫と別れる決意を固めていることで深い憂愁に閉ざされている彼女のすべての側近者を慰めました。と申しますのは、(彼女の夫は)彼女の前で、邸内にすでに五人の側女を囲っているのです。彼女にとってそれは大きい誘惑ですし、なおそのうえ、(夫は)彼女を苦しめ、ひどく虐待しております。悪魔もまた(彼女に対して)、夫からこれほどの大なる妨害を受け、不安のうちに置かれては(靈魂の)救いを全うすることはおぼつかないと見せかけて、彼女に攻撃を加えています。この件について彼女は一通の便りを寄こしましたが、私には大いに苦惱(の種)です。ところで私が特に案じていますのは、彼女が司祭たちがいる西国地方に行きたいと述べている点です。

- 忠興の女性関係、そして「虐待」により、ガラシャは「西国」への下向を希望。
- ※ここでいう「虐待」は、物理的暴力というより、キリスト教への敵対的な態度、侍女への仕打ちなど?ガラシャは天正16年に多羅を出産、夫婦関係は断絶せず。

17

### 3) ガラシャの離婚願望

- ・相談を受けた京都の宣教師オルガンティーノ、対応に苦慮。
- そもそも**キリスト教は離婚をみとめていない**し、伴天連追放令の中、信者となった大名夫人が宣教師のいる「西国」に下ってしまうと、**迫害の引き金になりかねない。**
- ⇒オルガンティーノは『コンテムツス・ムンジ』の一節を示し、彼女の説得に成功。

〔史料〕『こてむつすむん地』(天理図書館善本叢書と書之部第三八『キリシタン版集一』)

心よきのぞミ(望み)をもて、くるす(クルス、十字架)をかつげゆくにをひてハ、すなハち、なんじ(汝)のねかふきハめ(願う極め)に、くるす(クルス)よりみちびかる(導かる)べし、一つのくるす(クルス)をすつるにをひてハ、又べつ(別)のくるす(クルス)にあふべき事うたがひ(疑い)なし、もしくはハなおまさりて(勝りて)をまきくるす(重きクルス)もあるべし、

- ☆ようするに、苦難(十字架)から逃れず、受け止めて忍耐するように、と説く一文。
- 言い換えると、**ガラシャにとっての「十字架」とは、夫の忠興との関係か…!?**

18

### 4) 忠興との関係の改善

- ・本能寺の変後、「謀反人の娘」となったガラシャと忠興の関係は、キリスト教に対する見方の違い、女性関係の問題もあり、必ずしも良くなかった模様。
- ところが、貿易との兼ね合いで**伴天連追放令は中途半端に。布教は黙認状態。**
- 文禄4年(1595)には、高山右近の導きにより細川興元(忠興の弟)が改宗。
- ⇒こういった状況を背景に、**ガラシャは文禄4年頃に信仰告白「ラウレス1957」。**
- ・この前後から、ガラシャは忠興にキリスト教の「種々の談話」を開始。宣教師の期待どおり、**彼女は夫に「福音」を説きはじめる**(「一五九五年度年報」『イ会日本報告集』)。
- その結果、**忠興はキリスト教に理解。ガラシャの晩年に夫婦関係は改善する。**

19

## 5 関ヶ原合戦の前夜、ガラシャの最期

### 1) 通説の確認

- ・**慶長5年(1600)7月17日、ガラシャは大坂玉造の細川屋敷で死去。**
- ・その理由は、豊臣秀吉没後の権力闘争の末に、この日に石田三成を中心とする西軍が大坂で挙兵。徳川家康に与した諸将の妻子を人質にとろうと企んだため。
- 西軍は大坂玉造の細川屋敷に人質を提出するよう、諸大名の中でも**最初に要求。**
- ⇒**ガラシャはその要求を拒み、最期を迎えることを選択した**といわれている。
- ・ガラシャの死に驚いた西軍は、東軍諸将から人質をとることやめた、とされる。
- すなわち、**その死は西軍の人質確保作戦をストップさせ、東軍に貢献するもの!**

### 2) 通説への疑問

- ①なぜ、挙兵したばかりの西軍は、一番最初にガラシャのもとへ?
- ②なぜ、ガラシャは死を選択せざるをえなかったのか?
- ③ガラシャの死は、本当に西軍の人質確保作戦に影響を与えたのか?

20

### 3) 疑問①／なぜガラシャは最初に狙われた？

#### ○細川忠興と石田三成の関係

・慶長3年(1598)8月の秀吉死去と朝鮮出兵終結後、国内では権力闘争が勃発。

→徳川家康と前田利家の対立、石田三成等の奉行衆と加藤・福島・黒田等の諸将の対立など。

・慶長4年閏3月、朝鮮出兵中に起きた蔚山城籠城戦にかかわる処分問題をめぐり、加藤・黒田・福島・蜂須賀・浅野・藤堂、そして細川忠興は大坂・伏見で三成を襲撃。

※忠興は蔚山城籠城戦に参加していないが、文禄4年(1595)「秀次事件」の時に三成から譏言され、険悪な仲。

→家康等の仲介により、三成一派は失脚(七将襲撃事件)。



〔熊本県立美術館2018〕より転載

西軍の中心人物・石田三成の肖像  
 石田三成は、慶長3年(1598)8月の秀吉死去と朝鮮出兵終結後、国内では権力闘争が勃発。三成は、徳川家康と前田利家の対立、石田三成等の奉行衆と加藤・福島・黒田等の諸将の対立など。慶長4年閏3月、朝鮮出兵中に起きた蔚山城籠城戦にかかわる処分問題をめぐり、加藤・黒田・福島・蜂須賀・浅野・藤堂、そして細川忠興は大坂・伏見で三成を襲撃。忠興は蔚山城籠城戦に参加していないが、文禄4年(1595)「秀次事件」の時に三成から譏言され、険悪な仲。家康等の仲介により、三成一派は失脚(七将襲撃事件)。

### 3) 疑問①／なぜガラシャは最初に狙われた？

#### ○家康との関係

・文禄4年(1595)「秀次事件」のおり、豊臣秀次から融通された金100両の返還に困った忠興を支援。

・慶長4年(1599)9月、前田利長に謀反疑惑が浮上。

→利長の妹が長男忠隆に嫁いでいたため、忠興にも嫌疑。

→家康、起請文の提出と前田家との縁切りを忠興に要求。

⇒忠興、家康の指示に従い、さらに人質を提出して弁明。

・翌年2月、一転して家康は、忠興に突然の加増。

→三成の妹婿で、三成失脚後に領知削減処分を受けていた福原長堯の旧領・豊後速見郡と由布院を付与。

☆かくして忠興は、誰もが家康派とみなす立場に。

☆三成にとっては政治的にも怨恨的にも忠興は目の敵に。

⇒西軍拳兵にあたり、細川家がまっ先に狙われた理由！



〔熊本県立美術館2018〕より転載

家康との関係  
 文禄4年(1595)「秀次事件」のおり、豊臣秀次から融通された金100両の返還に困った忠興を支援。  
 慶長4年(1599)9月、前田利長に謀反疑惑が浮上。利長の妹が長男忠隆に嫁いでいたため、忠興にも嫌疑。家康、起請文の提出と前田家との縁切りを忠興に要求。忠興、家康の指示に従い、さらに人質を提出して弁明。翌年2月、一転して家康は、忠興に突然の加増。三成の妹婿で、三成失脚後に領知削減処分を受けていた福原長堯の旧領・豊後速見郡と由布院を付与。かくして忠興は、誰もが家康派とみなす立場に。三成にとっては政治的にも怨恨的にも忠興は目の敵に。西軍拳兵にあたり、細川家がまっ先に狙われた理由！

### 4) 疑問②／ガラシャはなぜ死を選択せざるをえなかったのか？

#### ○この時、他の大名夫人は？〔水野・福田2007〕

・東軍に与した藤堂高虎、池田輝政などの妻子は人質となり、大坂城内へ。

・去就に迷っていた豊後の中川秀就の妻子は、西軍に与した親類の屋敷に収容。

・黒田長政や加藤清正の妻は、策略をもって大坂から脱出、国許へ逃避行。

→人質確保作戦にともない、死去したのはガラシャだけ。この件にかかる唯一の犠牲者。

#### ○なぜ、ガラシャは死を選択！？

・忠興不在時の緊急事態や、万一の時は、ガラシャは最期を迎えるようにという指示。

→「秀次事件」のおり、処分対象となる可能性があった忠興は、家臣に一報次第で「上様・御子様」を殺害し、屋形に火をかけ、自身は切腹せよと指示(『松井家記』)。

→「1596年度日本年報」にも「夫は、(彼に)危険が迫った時は、彼女自身もその後が続いて自殺するようにと命じた」という記事がみえる(『イ会日本年報集』)。

⇒会津征伐に向かう時にも、忠興は留守居の家臣に同様の指示を付与していた。

23

### 4) 疑問②／ガラシャはなぜ死を選択せざるをえなかったのか？

#### ○どうして忠興はガラシャに死ぬよう指示していたのか？

・黒田長政は留守居に「いかにもして我が母上(黒田如水の妻)と妻とを、ひそかに恙なく本国へ下すべし、城中に人質にとられる事なかれ」と指示(『黒田家譜』巻9)。

→細川家のケースとはまったく逆の対応。どうしてこのような差異が！？

・対応に違いを生んだ要因のひとつは、妻の出自の問題かもしれない。

→長政や加藤清正の妻は、徳川家康養女として嫁いでいた。命を投げ出せとは言いがたい。

→その一方、ガラシャは明智家の出身であり、人々は「謀反人の娘」とみなしていた。

⇒忠興は妻が「謀反人の娘」であることを引きずっており、最後まで外出させなかった。

※ガラシャの晩年に夫婦関係が持ち直し、忠興がキリスト教に理解を示した後も、彼女が教会を再訪したり、宣教師に会ったりした形跡がみられないのは、おそらくそのため。

☆レットルにより彼女が辱められる可能性を潰すべく、忠興は死ぬよう指示していた！？

24

### 5) 疑問③／ガラシヤの最期は関ヶ原合戦にどのような影響！？

○西軍の人質確保作戦と石田三成が語ったガラシヤの最期

- ・通説は、ガラシヤの最期により西軍の人質確保作戦に支障が生じたという見解。  
→もともと、**実際のところ西軍方は、その後も人質確保作戦を推進。**
- ⇒つまり、**ガラシヤの最期により、西軍の人質確保作戦がなくなったわけではない。**
- ・ちなみに石田三成は、当初はガラシヤの死去に驚いていたものの、やがて細川屋敷は遺恨により「焼討」されたのだと言説を変更。

〔史料〕慶長5年8月6日付石田三成書状写（「歴代古案」『愛知県史資料編13』）  
越中事、破御法度、被誣内府、御若輩之 秀頼様を申掠、取新地候故、遺恨深候、彼か妻子居大坂候ツ、焼討ニ被申付候事、

- 徳川家康に味方している者への**見せしめとして、ガラシヤの死を逆に利用！？**

25

### 5) 疑問③／ガラシヤの最期は関ヶ原合戦にどのような影響！？

○人質確保作戦に影響を与えたとする証言

- ・その一方、**ガラシヤの最期が人質確保作戦の徹底に影響を与えた**と述べる証言も。

〔史料〕慶長5年8月22日付佐々木正孝書状（「秋田家資料」『愛知県史資料編13』）

- 一、羽越中殿妻子、其外国持衆女子など改、二丸へ可入置旨使立、改候処二、羽越中殿留守居稲富・小笠原、右兩人として越中殿妻子ヲさしころし、火懸、腹ヲきり相果申候間、**双方（東軍・西軍のこと）、女子とも堅改申候儀ハ打置、人しち有之ハ取、無之ハ留守居之人しちを取置申候由、其間候、**

→状況により、女子（夫人）を無理に人質とすることはやめ、「留守居之人しち」をとってすますことも。

⇒**ガラシヤの最期が、無理に大名夫人を人質にしようとした場合のリスクを明示。**

※大名夫人を下手に死傷させては、その大名を味方に付けることはできない。

26

### 5) 疑問③／ガラシヤの最期は関ヶ原合戦にどのような影響！？

○大名の妻子以外が人質にとられようとした事例

- ・肥後熊本の名加藤清正の妻は、慶長5年（1600）年8月8日までは大坂に逗留。  
→その後、脱出作戦を決行。医者通いと称して番所を通過して船に乗り、船中では二重に底板をはった水桶に隠れ、同25日に豊前中津（大分県中津市）に到着。  
そこからは黒田家の支援も受け、同年9月1日に熊本へたどりつく。
- ・こうした中、西軍は清正に味方するよう勧誘を続け、人質についても交渉。  
→この時に「家老之者共人質」でもかまわない、と条件を提示（『黒田家文書1巻』）。
- ⇒先ほどの佐々正孝書状の証言と一致。**ガラシヤの最期は、人質確保作戦に影響！**
- ☆**ガラシヤの最期は大名夫人の悲劇的な逸話に留まらない、政治性を帯びたもの。**
- ☆そして、結局、**西軍はひとりも人質を処分せず。ガラシヤの死が処分を及び腰に？**

27

## 6 ガラシヤの最期が細川領国に与えた影響

### 1) 関ヶ原合戦と細川家

- ・ガラシヤの死を忠興が知ったのは、慶長5年（1600）7月26日のこと。  
→『綿』巻12によると、それを聞いた忠興は、東軍諸将に向かい「**何の面目ありて上方に属すべく候**」と述べ、敵愾心をむき出しに。
- ・その後、忠興の軍勢は岐阜城攻め、関ヶ原合戦と奮戦。戦後は丹波平定に向かう。
- ・一方で、本国だった丹後では、7月後半から9月初旬にかけて田辺城籠城戦。
- ・慶長5年2月に獲得した豊後の飛び地では、西軍に与した大友勢との戦い。  
→**ガラシヤの件を加えると、細川家の関ヶ原合戦は各地で展開され、まさに総力戦。**

### 2) 関ヶ原合戦の論功行賞により九州へ

- ・戦後も多忙をきわめた忠興だが、慶長5年11月頃に豊前一国・豊後二郡を拝領。  
→**各地で西軍と戦い、妻のガラシヤまで失った軍功に報いての大幅な加増！**
- ※戦前に約束された但馬ではなく、「**遠国**」九州になったのは意外だったらしいが…。

28

## 6 ガラシャの最期が細川領国に与えた影響

### 3) 新領国における忠興の宗教政策

#### ○忠興のキリスト教受容

- ・豊前一国・豊前二郡の拝領が決まった後、すぐに忠興はオルガンティーンへ連絡。
- 「司祭やキリシタンたちを大いに助けることに決めたから、その国から出ぬように」現地へ伝えるように要請（1599-1601,日本諸国記『イ会日本報告集』）。
- ・さらには、慶長6年（1601）に豊前へ下向すると「すべての者がキリシタンとなり、必要な教会を建設することができるよう寛大な許可」（「同上」）。
- 忠興はすぐにキリスト教布教を許可する（むしろ推進する）方向性を打ち出す。
- ・慶長7年に中津から小倉へ本拠地を移転するにあたっては、小倉に教会を設置。
- ガラシャが唯一会ったことのある宣教師グレゴリオ・セスペデスを司祭に。
- ⇒キリシタンは3,000人を超え、10年間だけ細川領に「キリシタンの時代」が到来！

29

## 6 ガラシャの最期が細川領国に与えた影響

### 4) なぜ、忠興はキリスト教を受け入れたのか？

#### ○前代の領主黒田家との関係

- ・関ヶ原合戦の論功行賞以前まで豊前六郡を治めていたのは黒田長政・如水父子。
- ・とくに如水は、伴天連追放令の中でもキリスト教に好意を示し続けてきた人物。
- 黒田領には2,000人以上のキリシタン。かかる状況を踏まえ、キリスト教を受容？
- イエズス会宣教師のガラシャに対する姿勢との関係
- ・伴天連追放令の後、西国に逃れた宣教師の中には、密かに上方へ戻った者も。
- ・宣教師オルガンティーンは、ガラシャの「靈魂に対する愛情」ために京都へ。
- ・ガラシャが大坂玉造の屋敷で最期を迎えた後は、彼等がすぐに遺骨を拾い、葬儀。
- 彼女のために諸事対応してくれた宣教師たちに、忠興は応えなかった可能性。

30

## 6 ガラシャの最期が細川領国に与えた影響

### 4) なぜ、忠興はキリスト教を受け入れたのか？

#### ○家のため、自分のため、徳川家のために死去したガラシャの靈魂救済

- ・徳川家康の側に仕える僧侶から、領内に宣教師を置いている点を非難され、反論。

〔史料〕「1603,1604年の日本の諸事」（『イ会日本報告集』）

「自分はキリシタンではない」が「妻ガラシアはキリシタンであった。そして、（その彼女は）夫の名誉と今、日本の君主となっている内府の名誉のために生命を差し出して、キリシタンとして死んだ。そのため自分はかくも忠実な妻に感謝せざるをえず、自分にできる仕方で、彼女の靈魂が救済されるよう助けているのであり、こういう訳で、彼女の（ための）聖祭のために領内に伴天連を置いているのである。自分は正当な理由であって伴天連を援助せざるをえない」

→ガラシャの靈魂を救済するために、宣教師を招き、援助していると証言。

⇒つまり、彼女が家のため、夫のため、徳川家のために命を投げ出したことが、細川領国における宗教政策の根拠に。キリスト教の受容に影響！

31

## おわりに

#### ○細川領国における「キリシタンの時代」のその後

- ・ガラシャの死を細川忠興は悼み、教会で一周忌を行なうよう宣教師に依頼。
- 慶長16年（1610）にセスペデスが亡くなるまで、ミサ形式の法要を実施。
- ・しかし、慶長15年頃から忠興は禁教に政策転換。幕府の禁教令に先行。なぜ？

#### ○ガラシャ研究の射程と可能性

- ① 織豊期の政治史に深くかかわった明智家・細川家に関するファミリーヒストリー。
- ② 織豊期を生き抜いた大名夫人の動向や振る舞いをうかがう格好の事例として。
- ③ 伴天連追放令の中で改宗し、敬虔な信仰生活を送った女性信者の代表例として。
- ④ 本能寺の変や「秀次事件」、関ヶ原合戦に翻弄されつつ生き、関ヶ原合戦にあたっては、人質確保作戦や、戦後の細川領国の宗教政策に影響を与えたという政治的な存在として。

32